美術月評　11月

黄金忠博

大学が擁する作家陣　存在の儚さと確かさ　絵本をリアルに体験　美術家の覚悟と挑発

県立芸大退任教員　仲間伸恵

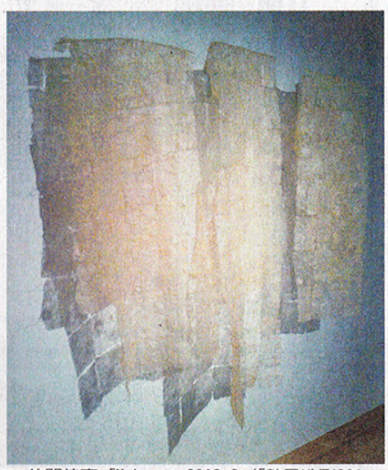
儀間比呂志展　照屋勇賢

芸術の秋といわれる通り、今月もさまざまな展示会が県内各地で行われ、我々の眼と心を楽しませてくれるのと同時に、沖縄という場の持つさまざまな問題に触れる機会となった。

美しい作品に出会うと、その美しさに心が躍り、歓ぶ。その歓びは、生きていく力に変わる。アーティストはどのような時代、境遇、環境にあっても、美しい作品を作り続けることで人々に生きる力を与えているのだと思う。その活動が、その場の生活習慣となり美意識となり、そして社会意識として構築されていく。このことが強く感じられた二つの展示会がある。

その一つ「県立芸術大学所蔵　退任教員作品展」（10月27日～11月4日、県立芸術大学附属図書・芸術資料館）は、県立芸大美術工芸学部の退任教員方が大学に寄贈した作品の展示会で、絵画、彫刻、デザインなど多様なジャンルの作品を見ることができた。芸術大学で指導する傍ら、作家として制作してきた教員たちの作品群は、どれも極めて質が高く、素晴らしい内容であった。特に多和田淑子の作品には、人の手による高度で確かな技術力から生まれる織物の美しさに魅了させられた。またこのような素晴らしい作家陣による教育環境が整った大学で自分が学べたことを誇りにも思う。

多和田淑子「はなみずき」（「県立芸術大学所蔵　退任教員作品展」より）＝那覇市の県立芸大附属図書・芸術資料館



仲間伸恵「Makoyama2012-2」（「熱風造形2012」より）＝那覇市の県立芸大附属図書・芸術資料館

もう一つ「熱風造形20 12」（11月17～25日、県立芸術大学附属図書・芸術資料館）は同じく沖縄県立芸大の教員が主体となって行ったファイバーアートの展示会。この展示会の趣旨も人の手によって生み出される作品により、人との繋がりを再確認するというもの。

伊計島で行われた「儀間比呂志・絵本の世界」（11月20～25日）は、イチハナリアートプロジェクトの第2弾として旧伊計小中学校にて開催された。「イチハナリアートプロジェクト」とは、伊計島を舞台にアートに親しむ場所を作り出す島づくり計画だが、本展では絵本ということもあり、数多くの親子でにぎわっていた。会場では、絵本に使用した原画だけでなく版木も展示され、その制作過程も目にすることができ、その手によって生み出される版画作品に子どもたちも興味を持って見入っていた。また作品に登場する民具や生活道具の現物が展示され、それらに触れることにより絵本の中の生活がよりリアルに実感できる仕掛けになっていた。このような体験は、造形教育としても非常に重要な体験であり、また作品に深く入り込んでいける良い企画である。さらに絵本の読み聞かせも親子で楽しめ、アートとの境界をなくし親しみを深めることができる内容であった。今後このプロジェクトがさらに展開し、地域活性のためのアートの役割が高く評価されることを期待したい。

イチハナリアートプロジェクト第2弾「儀間比呂志・絵本の世界」の展示風景＝うるま市の旧伊計小中学校

豊里友行個展「沖縄　1999―2012」の展示風景＝沖縄市のギャラリーM&A

オスプレイ配備反対県民大会を報じる新聞紙面に刃を入れてメッセージをくりぬいた照屋勇賢作品＝南風原町の画廊沖縄

アートプロジェクトCOTONOHA Art Exhibition「ART SHOW 4U_26°N」（11月8日～12月9日、COTONOHA ART SPACE+CAFE）は、4U_parisamsterdamというファッション・ブランドからインスパイアーを得た5名のアーティストによる10作品の独創的な現代アートの展示会であった。その中から、知念結菜の作品は、堅牢な画表面の中に忍ばせた文字によるメッセージと繊細な描写表現の対比により、女性の持つしなやかさと強さを感じることができる。ただこの展示会自体のコンセプトであるファッションとアートのコラボレーションという観点で見ると、ファッション側からの作品提示がなく、希薄さは否めない。今後の展開に期待したい。

堅牢さと繊細の対比　沖縄の意識を表面化

知念結菜

豊里友行

知念結菜作品（「ART SHOW 4U_26° N」より）＝宜野湾市のCOTONOHA ART SPACE+CAFE

作品の持つ美は具体的な形として目の前に現れる物だけではなく、その背後や意識の中に潜めている場合もある。アーティストは、見る側をその奥底に誘い込み、社会の歪みを露呈するのである。

豊里友行個展「沖縄　1999―2012」（11月6～11日、ギャラリーM&A）。この10年余りの期間に撮影された作品は、沖縄の今の空気感をジャーナリスティックな視点で捉えている。一見バラバラに見えて点在するさまざまな場面、事件は、繋げていくと全体の社会構造が見えてくる。今現在沖縄で起こるさまざまな事件が、今一瞬で起こったことではなく、第2次世界大戦、沖縄戦といった歴史背景から地層のように積み重なって起こっていることを明確に伝えている。彼の一連の写真には、ここ沖縄で生活する人々の意識が表面化されており、生きる強さをいや応なしに感じてしまう。

国際的に活躍する現代美術家・照屋勇賢の沖縄では2回目となる個展「照屋勇賢展　I have a dream」（11月23日～12月2日、画廊沖縄）は、画廊沖縄の沖縄復帰40年企画として行われた展示会で、日米安保の政治的構図が明確に視覚化されたものであった。それゆえに批判的な意見も多いだろう。画廊沖縄オーナーの上原誠勇氏も、県民大会を報道する新聞記事を使った作品に、あの写真に刃物を入れる行為に対しての温度差を指摘している。遠くニューヨークで感じたことと、現場である沖縄とでは、事の重さ、人々の痛みの深さが違っているのではないか。しかしあえて勇賢は、自分自身に痛みを得るためにあの新聞に刃を入れたのではないだろうか？　そのことから作品を通して社会に説いていく、伝えていくことはアーティストとしての使命だという覚悟が見えてくるが、実は沖縄という風土、歴史、社会情勢が彼にこのような作品を作らせているとも言える。いずれにしろ彼は、常に社会の動きを敏感に感じ取り、そこを挑発する作品を発表し続けている。

さまざまな展示会を見ることで作品は、作家の、またはそれを取り巻く人々、地域、社会の思いを伝える媒体であり、より良く生きるための力を与えてくれるものであるとあらためて考えさせられた。

（那覇造形美術学院学院長）